



TITLE:

山本先生への追憶

AUTHOR(S):

大塚, 一朗

CITATION:

大塚, 一朗. 山本先生への追憶. 経済論叢 1941, 52(6): 749-752

ISSUE DATE:

1941-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/131548>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第六號

昭和十六年六月

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者労働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戰時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

山本先生への追憶

大塚 一朗

◇先生と個人的に御話し出来る機会を持つたのは、先生の御指導の下に大學院入學を許可せられることになつた直後、先生を大學の研究室に御訪ね申し上げた時が最初である。それから後しばらくの間私は御部屋の鍵を託されて自由に先生の研究室に出入し、書籍雜誌等先生御使用の文獻類の整理を御手傳申上げた。其

の際先生は私の僅かばかりの御手傳にも一々、言葉少なにしかし何ともいへぬ温かな慈愛籠れる御態度でその勞を暢はれる御挨拶を賜はつた。それまで教室に於ける講義の際のいとも嚴正謹直なる先生にのみ觸れてゐた私は、かゝる寛やかに御優しき御態度に接して、しばし定に意外の感に打たれた。しかし、それは全く私の眼が狭く淺はかなものであつたことをもの語るにすぎない。そこにこそ先生の奥深く廣い尊い人間的品位が現はれてゐたのである。嚴にして愛、直にして寛なるところに、忘れ得ぬ先生の御風格の一面があつたと思ふ。

◇先生の専攻された學問領域は甚だ廣く、それは移植民政策學、工業經濟學、水産經濟學、はた農業政策學と多方面に涉つてゐた。従つて又直接にその御指導を蒙つた門下には種々なる範圍の専攻者が包容されてゐた。しかし、私が長い間御指導を受けた間に、御話はただの一度も工業經濟學關係以外の事に觸れられたことは無かつた。この邊のところに、先生が種々なる

専攻領域を持たれながら、しかも各々の方面に或は建設者、大成者として、或は開拓者として、乃至異色ある學者として、それぞれの道に一流の地位に達せられた所以の學者的用意の一端が窺はれるやうな氣がして、尊いことと思ふ。

◇先生の御風格の一面は、謹嚴なる御人格の一屬性的特徴でもあつたらうか、相當の『凝り性』であられた。人も知る通り先生は一流の名文家であられたのであり、デヴィス博士著新島襄先生傳の御翻譯の如き、眞に氣品高く滋味掬すべき名文で、知る者は皆これに珍重措かないが、その他學問上の御著述の如き皆然りであつた。それらのこと、御生得に出づるところあるは勿論だが、又筆をとられて一言一句忽にされざる凝り性に因るところも大いにあつたのではなからうか。この凝り性と申すべきか、謹嚴性から、著書又は雜誌論文の印刷に於けるミスプリントはいふまでもなく、活字の位置の不正等に至るまでも、極めて詳細鋭敏に注意せられて、やかましく、そのことは印刷所等に於

でも先生の御仕事には特に入念の心使ひを拂ふに至らしめたと、嘗て印刷所の人から洩れ聞いたことがある。

◇先生が御義烈々を尚び公正不黨を重んずるを好まれ、人格の上にこれを體現實踐することに人一倍強烈なる良心的欲求を有してゐられたことは、先生を知る者の皆認めるところである。しかし、先生は又一面實に己に嚴にして他に寛なるの方であられた。世事必ずしも凡て這般の點に於て先生の意に適つたといふ譯でなからうが、少くとも私は長い間ついぞ一度もそれらの點につき先生が他に對して嘆聲非難を洩らされたのを知らない。先生は又極めて強烈なる盡忠報國の一念に燃えてゐられた方であつた。御逝去の直前迄、客あれば時事を熱論して談些も私事に及ばず、自ら老境徒に爲すなきを憾みただ重厚有爲の人材輩出に期待するとの意を伸べられてゐたと通夜のおり家人の方から傳聞してゐる。謙虛にして而も至誠殉國の御精神を目に見るが如くである。

◇先生は謹嚴そのものの如き御風格の一面に又甚だ豊なる美術趣味殊に書畫の趣味を有せられたと拜察する。私は昭和五年の春に先生に隨行して約三十日間、明け暮れ居を共にしながら、東南歐一帶の地方を旅行したことがある。私の在外滯獨研究生活中に、先生が歐米出張の道すがら獨逸を訪問せられた機會に於てのことである。この大陸旅行中或は伊太利に於て或は佛蘭西に於て、各地の寺院、美術館に歐洲名畫に接せられる度毎に、如何に熱烈なる興味を以て先生がそれらに吸ひつけられるやうに見入られ又詳さに研究せられたが、今でも眼のあたり見るやうな鮮やかさで思ひ出される。停年御退職の直後に御宅に御訪ねした或る折、先生は、何くれの話の中に、これまで多忙の儘に打ち棄てゝ手に入ればなしておいた書畫類がたまつてゐるので、此の際だんだんにこれを整理し表装もしておきたいといふやうな御話をせられた。又事實その後先生の御居間にはいろいろの掛け物、屏風等が見受けられた。これを楽しんでゐられたものと思ふ。

◇先生は謹直方正、禮に厚く、苟も亂れるといふやうなことは露ほども見られない方であつた。基督教敎的御教養の結果でもあらうが、又御天性に出でたところであらうと拜察する。かくて、先生はたぶん御生涯の間を通じて、煙草や酒には絶対に御近づきが無かつたと思ふ。前段に述べた昭和五年の歐洲大陸旅行の砌りなどにも、ドナウの漣波月影を映して兩岸の大都の電燈の光が夜空に輝くブダ・ペストの一夜の宿にも、ゴンドラの舟唄が旅愁を誘ふベニスの夕にも、はたベス・ビオの火が天を焦すナポリの夜にも、晚餐の飲物は終始一貫ただ淡水一杯の押し通しであつた。かくて、卅日の長い東南歐大陸旅行も完全に清教徒的な淨らかな思ひ出を残すだけで、あれもこれも今はみなただ忘れ難き懐しき思ひ出である。

◇京洛を一眸に見る洛東若王寺の山頂では今日も氣澄みて樹立高きところに松籟颯々の聲が聞かれた。その清らかな聖地で、しかも先生の最も尊敬せられたる二三の先輩偉人の墓所に近く、先生の靈骨が今日靜か

に永遠の居所に著かれた。先生の靈よ永へに安かれと
禱りつゝ、筆を擱く。

(五月廿一日、先生の靈骨を洛東若王寺山頂に送りと)